

平壤見聞記

(本原稿は「新都市」2001年11月号に掲載されたものです。)

東洋大学国際地域学部教授 小浪博英

はじめに

この度、図らずも平壤を視察する機会を得たので、その概要を報告する。これは本年4月、東洋大学国際地域学部国際観光学科を新設したことに伴って本学に着任された梁春香教授の計らいによるものである。視察団は「日本観光関係者友好訪朝団」と冠して東洋大学教授5名、城西大学教授1名、観光・旅行業関係専門家3名から成る合計9名であった。日程は平成13年8月29日に成田から北京に飛び、北朝鮮のビザを取得するため北京に2泊して、平壤には8月31日から9月3日まで4日間滞在した。帰りは再び北京に1泊しては9月4日に帰国した。利用した飛行機は成田・北京間がユナイテッド、北京・平壤間が中国北方航空であった。北方航空は途中、大連に立ち寄るので、人は大連空港にて出入国、荷物は北京空港にて通関という変則のため、帰途、大連空港で入国したにもかかわらず北京空港では荷物の届く国際線到着に行かねばならず、もう少しで間違うところであった。また、中国入国が2回になったため、中国入国ビザも2回分必要で、中国ビザ取得費用が2倍の1万円になってしまった。

北朝鮮の概要

北朝鮮は正式名称を「朝鮮民主主義人民共和国」と言い、地元では「共和国」と呼称している。紀元前3000年頃の古朝鮮から高句麗、渤海、高麗、李氏朝鮮を経て、1948年に現体制となった。その間1910年には日本による朝鮮総督府が設置され、1945年まで総督府が存続した。1950年には朝鮮戦争が勃発し1953年の停戦協定締結まで大きな戦禍を受け、豊臣秀吉による1592年と1598年の壬辰戦争以来の大被害となった。朝鮮戦争では平壤に人口を上回る数の爆弾が投下され、まちは文化財を含みすっかり焼き尽くされたといわれている。

北朝鮮の面積は約12万平方キロで本州の半分より少し広い。人口は約2000万人。近年では人口が増加しないので人口増加策をとっている。行政区域は9道、4政令都市(直轄市)から成り、政令都市は平壤市、開城市、南浦市、羅津・先鋒市となっている。緯度はそれほど高くなく、平壤で日本の盛岡くらいである。

国民(人民)は生後4ヶ月目に保育所に入り、4歳まで保育(昼間のみ)を受ける。5歳になると幼稚園、6歳から10歳まで小学校、11歳から17歳まで中・高教育を受ける。ここまでが無料の義務教育で、大学は無料ではないようだが、奨学金があるので心配はないということである。17歳の時、つまり義務教育の最終年になると本人が進路の希望を出す。進路の希望は必ずしも受け入れられるわけではなく、学業に優れた5%程度は大学へ、その他の者は軍、専門学校、職場などに配属される。ただし、一人っ子の場合は親の意見を聞くことになっている。結婚は見合いも恋愛もあるが強制されることはない。大体20代後半が適齢期である。住宅は全て配給制で、大家族や新婚家庭が優遇され、平壤で見る限り不足している様子はない。

通貨はウォンであるが、韓国ウォンの約600倍の価値があり、1米ドルが約2ウォンである。我々観光客は両替をしないで、持参したドルや円をそのまま使用するよう指示された。実際、

円で払うと、売り子が円のお札や硬貨の入った箱を持ってきて、お釣りも円で返してくれた。ドルや円で払うよりも少し得をするようなレート設定のように感じた。

ビザの取得は日本では出来ず、北京かウラジオストックの領事部で発給してもらう。ただし、一月以上前に政府観光総局か旅行社を通じて申請しておかないと発給されない。領事部は午前中しか受付しないし、本人の署名が必要となるから注意が必要である。チャーター便で日本から直行する場合は事前に手続きを取っておけば平壤空港で現地発給が可能とのことである。とにかく観光には重点をおいているので、手続きさえすれば難しいことは何もない。特に羅津・先鋒市は経済開発区となっており、ビザ無しで来ても現地で発給するようなことを話していたが確認できなかった。観光案内書は「朝鮮魅力の旅」が朝鮮新報社(03-3269-0131)から発行されており、電話をすれば宅急便で届けてくれる。年間の外国人観光客は約10万人だと言っていた。

食料は本年春先の干ばつが響いて、作付けが一月遅れたために、本来収穫できるはずの米やトウモロコシが未だ田畑に実らないまま残っていた。この冬が心配である。電気も慢性的に不足気味で、懐中電灯の持参をお勧めする。トイペは紙質が合わないかもしれないので気になる方は持参された方がよい。夏場は蚊取り線香も有った方がよい。団員の中には食べ過ぎかもしれないが、おなかをこわした者もいたので、抗生物質を持っていった方がよいかもしれない。筆者はもっぱらアルコールで消毒した。焼酎、ビールはホテルやレストランであれば何処にでもあり、高級ホテルにはウイスキーやブランデーも置いてある。ちなみに、ミニチュア瓶が5ドル前後のようだ。

国民の所得は体制が異なるので比較できないが、一般的には平壤周辺で100~200ウォンくらいのようなようだ。日本円で月給6000円から12000円である。地下鉄やバスの料金が6円なので仮にこれを物価水準とすれば20万円から40万円くらいに相当する。

平壤およびその周辺

平壤には空港が4カ所あるそうだが、我々が使うのは平壤都心から北西に約20キロ行った所の純安(スナン)空港である。一日2~3便の国際定期便が発着している。9月3日に訪朝した江沢民主席もこの空港を利用していた。

空港に着くと早速出迎えがあり、国家観光総局の金成俊氏と金錦淑嬢であった。携帯電話を税関に預けて無事入国し、越後交通が使っていたらしい朝鮮国際旅行社の大型バスに乗り込んだ。午後3時半頃である。初日の行き先は妙香山で、平壤から約160キロ北東に行った所である。道路は側帯のゆったりした4車線の高速道路(写真1)で軍が最近完成させたいらしい。5時に到着すると香山ホテル(写真2)にチェックインして、早速「普賢寺」を訪ねた。普賢寺は朝鮮語でポヒョンサといい、高麗時代の11世紀に創建され、朝鮮戦争で焼失したが、その後復元したものである。秀吉来襲の折、当山の西山大師が全国の僧侶に呼びかけて決起したことが記されている。ちなみにこの国の宗教について錦淑嬢に聞いたところ、現在は宗教活動は無いとのことである。なるほど境内に僧侶の姿は無かった。しかし、教典は朝鮮戦争の際も岩陰に隠して焼失を免れたそうであるから、宗教活動が無くなったのは近年のことであろうと思われる。仏像はピョンヤン市内に会社があり、史実に基づいて忠実に復元してあるとのことである。

香山ホテルは新婚旅行のメッカだそうで、室内も清潔である。水準でいえば4つ星だろうか。階下にはレストランやカラオケがあり両金氏が流ちょうな日本語で歌ってくれた。松茸が有った

ので一人1本ずつ食べることにしたが、焼くことを知らないので生で出てきてしまい、細く裂いて醤油をつけて食べたが、なにやらもったいない感じであった。



写真1 妙香山へ向かう高速道路



写真2 香山ホテルと日本製観光バス

翌日は国際親善展覧館（写真3）を訪ねた。ここには金日成主席と金正日総書記に世界各国が贈った贈り物が陳列されている。各国の元首からのものは赤い敷物、それ以外のものは青や緑の敷物であり、日本からの贈り物で赤い敷物に乗ったものは見当たらなかった。それでも日本からの贈り物が海部俊樹氏、宇都宮徳間氏、奥田東氏、金丸信氏、トヨタ自動車など数十点はあったと思う。これだけ綺麗に世界の珍品が整理されているといずれ世界遺産になるような気がした。建物は広く豪華で、20ヘクタールくらいの敷地一杯に6階建ての建物が自然に溶け込んで建てられている。日本で建てたら数千億円はするだろうと考えられるほど立派である。収蔵品の数は20万点とも30万点ともいわれ、とても全部を見ることはできない。記念撮影（写真4）の後、豪華な昼食（写真5）を食べ、妙高山をあとにして平壤市内に戻った。



写真3 国際親善展覧館



写真4 視察団一行

平壤市は人口200万人程度で大同江（写真6）と普通江が流れる柳の町で、別名「柳京」と呼ばれている。市内には大同江河畔の緑地をはじめ都市基盤が整然と整備されており、2本の地下鉄（写真7）、路面電車（写真8）、トロリーバス、普通のバスなどが頻繁に行きかっている。自動車は多くなく、人々は公共輸送機関か徒歩で移動しているようである。交差点には大概婦人警官が真ん中に立っており、背中が見えるときは赤、顔が見えるときは青（これは間違いかもしれない）左折（日本でいえば右折）は行く手を警官が指してくれるまで待つ、というのがルールのようなのである。ちなみに信号機は存在しない。ホテルの窓からはゴルフコース（写真9）も見え日本のまちよりもずっと綺麗な町である。綺麗なところだけを見せてもらったのかもしれないが、

これだけのまちづくりはやはり賞賛に値する。経緯を察してみると、朝鮮戦争ですっかり焼け野原になったあとを道路の位置を決めて木造平屋で埋め尽くし、その後一部を6階建てのビルに建て替え、更に残った木造平屋を近年高層化しているように思われる。大ブロックの土地利用なので、いわゆる区画道路はほとんど見当たらない。同じ焼け野原になった東京で出来なかったことが、ここでは出来ているのである。



写真5 豪華な昼食



写真6 大同江河畔



写真7 地下鉄復興駅のホーム



写真8 頻繁に走る路面電車

写真10は大同江の河畔に立つチュチェ塔の上から東側を見下ろした市街であるが、真ん中に古い木造平屋が、その遠くに古い中層ビル、手前には新しい高層ビルが立ち並び、平壤の歴史を物語っているように見える。まちは東西に流れる大同江と北から合流する普通江がそれぞれ湾曲しているのに加えて鉄道が北西から南東に通っている複雑な地理条件のため、その構成を一口で説明することはできない。図1に示すとおり、東から流れてきた大同江が大きく南に向きを変えて約5キロ南下した後、再び西に向きを変えている。また、そこには大きな中州があり、河川は二本に分かれて、その北側の分川に普通江が北から合流している。普通江も合流する前に大きく湾曲しており、両河川に囲まれる都心地区はあたかも島状になっている。そこに鉄道が斜めに入ってきたから、なんともいえない形態を呈している。街路の幅員は50～100メートルと十分広く、区画道路と思しき道路は見当たらない。いわゆる公的施設は広く市内に分散し、どこに集まっているということはない。強いて言えば大同江の両岸に南北に配置されている。デパートやショッピングセンターは見当たらず、配給制が徹底していることを感じさせる。

平壤の宿は羊角島ホテルで大同江の中州にある47階建ての高層ビルである。屋上には回転式レストランがあり、座っているだけで平壤市の全貌が見渡せる。居室は清潔で、日本でいえば4

つ星くらいだろう。エレベーターや室内の設備に日本製のものが多く、これが国交のない国なのだろうかと思議に感じる。



写真 9 羊角島ホテルから見たゴルフコース



写真 10 チュチェタワーの東側市街地

平壤の見所は市街地の南方に復元された定陵寺、市内の凱旋門、同じく万寿台の国会議事堂、人民大学習堂（機能は国会図書館） 巨大な金日成主席の銅像がある朝鮮革命博物館、などであるが、朝鮮戦争の戦火のため古いものはない。サーカスや柳の景色も観光資源となろう。地下鉄は地下 100 メートルという大変深いところにあり、興復駅のエスカレーターは延長 200 メートルもあった。それだけに分速 50 メートル程度と、日本のエスカレーターの 1.5 倍くらいのスピードで動かしているの、乗り降りには注意が必要だ。

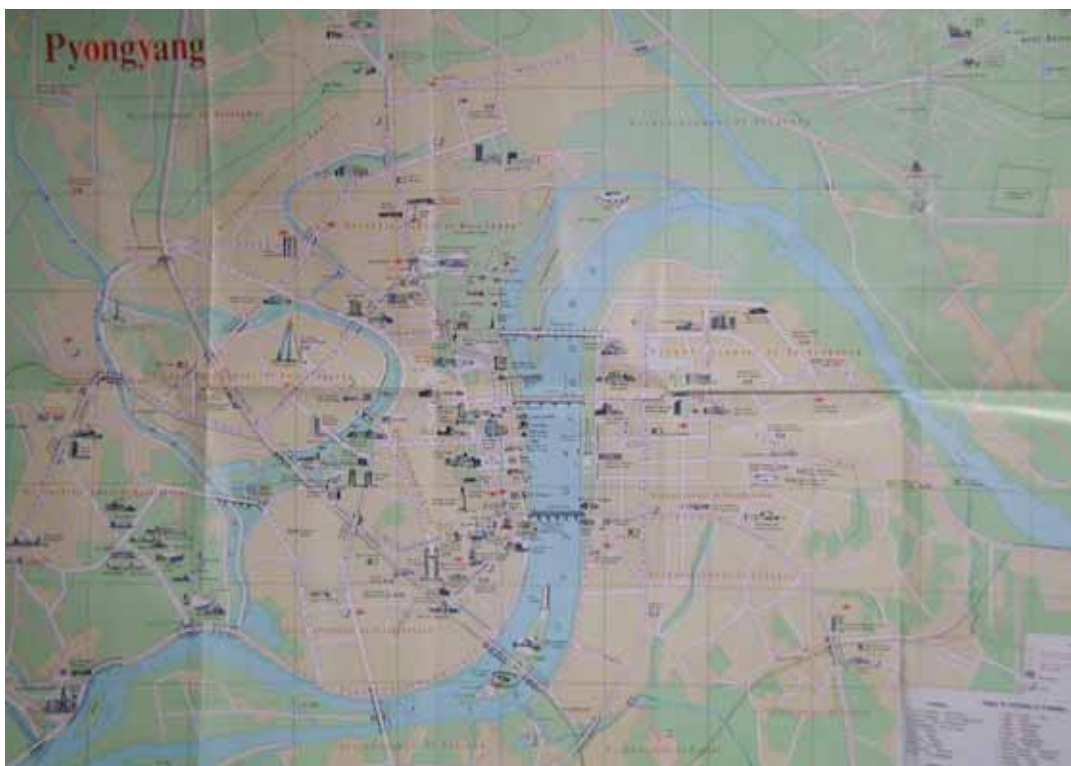


図 1 平壤市街図

おわりに

珍しいところを訪ねたときの常で、毎日が目を見張る思いではあったが、さてリピーターが期待できるものは何だろうかと考えたとき、それがあまり多くはないことに気がついた。ひとつひとは立派な施設であるが、そこに何か足りないものがあるような気がする。リピーターを引きつけるものは、人や歴史や料理に加えて優れた文化や自然などではないかと思われるので、それらを発掘する必要がある。今回は全行程が立派な観光バスであったので、人との接触が余りにも少なかった。また、高麗の伝統文化を十分に堪能する場所がなかった。妙香山は今度来たら登ってみようという気になるので、この標高千数百メートルの山とおいしい食べ物を組み合わせれば優れた観光地となろう。国際親善展覧館も世界の名産品や工芸品が集まっているので博物館的面白さがある。北京がそうであるように、観光客が自由にまちを歩いて、そこに住む人々に触れながら自分好みの新発見をするような舞台装置を早く作る必要がある。空港も施設を更新して、もっと大量の旅客をさばけるようする必要がある。

街づくりの点では体制の違いがあるので何とも言い難いが、区画道路がないということは限界性を醸し出すことはできないであろう。現在は商店街がないから仕方がないが、将来開放経済が進展し、商店街が作れるようになったとき、それをどこに作るかが難しい。多分、日本の観光地に見られる、街はずれの観光客専用お土産店街みたいなものになるのであろうか。あるいは大きなビルの百貨店や専門店街かもしれない。道路が広く寒冷地であるので、地下街を作ってもいいかもしれない。

また機会を探して、北朝鮮の別の所を見に行こうと思っている。その時、今回の印象と比べてどのような変化が生ずるか自分自身楽しみにしている。 (こなみ ひろひで)